特別
イ4
3163
1(3)

後撰和歌集巻第
春上
三月一日二条
藤原敏行朝

ぬふよりひあはれとハしまぬる
朱雀院の子百よおりましけるにて
りきと侍わそえつかまつれ定光
朝によつかりけれ

松しひよわかるしつまぬ
いつしのとうまつ
宮御在し
まろにはしらん人
わかるしもしらしもしらわ

左大下
小野宮 實頼 貞信公
清信公 一男

子百よおとこのもとよわるに松ひ
よりふんまつまつ
きとは
君のうや野へよこまつをはれ
あしかるこよつまつまつ
郎さしまと
宮のうちのひのの野ゑ
なるまえしかれ人もつもやと
子百よまつわかるへはしてつ
かりけれ

[illegible]

行明親王

延喜親王實
寛平第十
母京極法皇前

[illegible]

紀友則

[illegible]

いそのかみほりまちをかはらぬ
寛平の御時后の宮の歌合
よりし人しまを
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人の家の花をめでて思ひければ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

紀貫之

続撰和歌集巻第二

春中

としふれて梅の匂ひはかはらねと
くる年のまたあらためてみる

大納言梅宮家天暦元七月薨年十五

為家 按察使卿

さえかへり時の花のにほひハおもひやれ
咲ちる花のかせによそへて
園の竹の葉の竹のうちにも

文書十七年正月五位上兵部少輔長保三四年同十月中将

為秀 伊勢守

竹の葉にもよそにうつるかな
あさとのかすみのかゝるやまの
やまのはのきえぬ雪

僧正慈円

うつりゆくとしのはるの道のへに
花の色にうつるゝ山の人のたき
花にまつ道にふるるといへり
あくかれし春の山のはの

吉田

山の端にいつかいつのまにか春
花の山の桜かすみにたつ
ほかの山の桜もさくらたにかな

くふさくらさくはなにとゝぬ是
かこめはとらふ風のこゝぬまふ
家よりもとき所はまたの時なり
哉の櫻の花はいつけるゝ

芦原右大臣

定長二年贈右大臣正二位正暦四年五月十五日大臣
正一位

櫻葉ぬしをわすれぬ物なるに
ふきこんかしはことゝそいをよ
春の山をいをとゝ
春の櫻のいとゝわかれをしたるを
いつまでのしらくもひとゝまる

花のちるをアハレ

凡河内躬恒

あひおもひそくらふことを人なる櫻を
花のしにしれぬなりめもとゝまる
かゝるのまをまたまゝ

よみしらず

海のまゝ雲にまゝ鮮なる
のしゝふきとけ女のめまゝ風
朱雀院の櫻のおもしろきこと
延光朝臣のかゝるまゝ付て所にて

女のもとに

拾遺和歌集巻第三

春下　題しらず　天暦二年大納言元方右大将四十賀　康保二歳六十八

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

（カ）

春ごとに流るる川を花とみて折らずも過ぎじ山の井の水

（カ）

春ごとに花のさかりに逢ふ人はちとせをへても若くぞありける

（カ）

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

（カ）

春ごとに流るる川を花とみて折らずも過ぎじ山の井の水

（カ）

春ごとに花のさかりに逢ふ人はちとせをへても若くぞありける

（カ）

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

（カ）

春ごとに流るる川を花とみて折らずも過ぎじ山の井の水

（カ）

春ごとに花のさかりに逢ふ人はちとせをへても若くぞありける

（カ）

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

（カ）

春ごとに流るる川を花とみて折らずも過ぎじ山の井の水

（カ）

春ごとに花のさかりに逢ふ人はちとせをへても若くぞありける

（カ）

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

（カ）

春ごとに流るる川を花とみて折らずも過ぎじ山の井の水

（カ）

春ごとに花のさかりに逢ふ人はちとせをへても若くぞありける

（カ）

人のかたのきゝて成ぬれば山吹の地
まことしなるもとこまきまとそつかり
さすひのひなるまゝ姫のおしかしをも
しらそうろふ山吹のしも
やよひりわの花のとゝわに道頃
まゝ所よ

僧正 雁昭

あるまゝきいふまゝ
こゝをしけにほとゝ
たいしまと
尺所うこの色とくふまゝ松をよ

ちとまゝ勝をとうけてとゝうる芳ふを
やよひの志しの十日頃は三原右大下
のまとけの所ハ此家まゝわそ行
うるに友の花とうる雁のまゝ此
なとまゝそ明きこゝ秋おほえまた
人の所ついそよ

三原右大下

蓮左大将内大下 高芳三男

のまゝ所きとゝ芳ふを
うこ井もさゝ

蓮福 新良

いつの君まちまいてめるれ様を
かも新まれ色をかへつ
あつまの人これ兼ねかるを
まそ

原仲定朝臣 延長八年右少将 承平六四従右兵衛督 大納言 貞恒男 光孝天皇孫

ちまれことはきこ
ことはとくらしかもしかすれ義
様のちるをとそ
とくいろまきたる

あ人しれ
るるまちはもおしけくもなす
やよひまうる有なるとしつまを
めしの比中ぬまよりへて左大臣の
家につかる

勇さ
あまりわとくへあるまそひきたれ
ほのまなしまとみをよしもあ

左大臣 小野宮

左
つまりわしのとくかるへきまちすれ
をかるまく人のあへしめやい
つまりまくてきのよりひかる前まさ

藤原雅正

夏

この比をて五月五日より今郭公
思ひ[illegible]
待人いたきなくなりしかれ
おもひの国のまなかいうらん
まちひつくらまくしかれ
なついはしとくまの葉のうらまを
先輩院の春宮まおしまの月の
時たちたまいしと月の御書所
まゐりまてとくこまりし
云よみけるに
大春日師範

五月雨にいるの時を
ちとしまいすもとや
方の東ふるや
岩東蓮屋
尼しの東の東
岩れまつ風
かすしいを
足川のしらしら
ことれのまとくなる
郡さて次
藤原高経朝臣

うまれよりかきをとりてもてなすわれ
人しまひ家をしめし畦のところは
萬とうまれぬへきは時なくまわるなり
家の家はまわるしこハ
むまとうまんよりへつゝかん無
とこなつの萬をうまんにことなす
過ぎと月日もかしつゝ里なん
とこなつは思ひてめそハ人はしぬ
なりぬのほとハいろはかんなん
花し

久といへハまれもなきはしなきはし
山とこなつしこゝとなる世なすやい
師君殿下のまゐるいまそ侍る
時とこなつの花をおわそしもそ
侍まハこの花は侍そ内侍かな
兄のうまをくまはわるなり

太政大下 貞信公

なそしこハいまとしもなくまもへとも
をくしそくハ安りしなわるを
たいしまと

よりかん人も

長根和歌集第五

秋上

こまそうの人々この歌は今は
よみ人しらず

俄にも風はしきしなるものなる
海ちかの日とはなれ人もいひけり
影さらば
うちつけに物のかなしきは東歌
秋のりしめをとりしと思へば
物思ひなる時秋立り人につかれる

たのこゝろ君は一重なし秋風は
うふよりふきぬれのものなしも
おもふことはわかる時
いとしなく物おもふ宿の菜の
姫とうけつる風はわけしさ
たいしまと
秋風はうちふきそむるクをは
えりしかくわけしのまかな
太平里
夜なりしたもとはなしなき物

たなばつめハ人かやいかに
きいしまと
あ風の何なりけ悪いうくもうかに
何かしとおりふをかりやくかんせ
玉ゝうたゝぬ物ゝうあゝ玉漢
としの初ゝまいたゝひとよのこ
秋の夜はいかもしるく七夕は
あるるしと夜ハ明まともあるなん
奥の玉ことは此葉といたしたん
としの初ゝまにかわかれ物を

七日 [illegible]人よつかりけに
[illegible]
[illegible]ことはこゝろひるなふハ七夕は
をとるやしなん悪いまのそわそ
七日 よみ人しまと
七夕はあま漢とわるこゝろひとん
をとる人の つまとなるまとせ
七夕をとゝかに
天河とをきわるまいとのこ事にも
君のふふ出いとしかゝるまのそ

後撰和歌集巻第六

秋中

延喜御時に秋ごとにはまいらせ
まつわらは　紀貫之

秋香乃たちぬる時いくらゝ
あはつの所くさ　えてわかる
萬乃にと出しもの　秋乃野の
あまにまゝひそ　ふかしつ
寛平御時后乃宮乃歌合に
よみ人しらず

浦ちかく立ぬ鶴ハもしかやを
くらゝまとしてえてわかる
かなし御ときのをこふ合に
有原おきなを
あはのしまゝ所なくいとゝ　めらはむ
いとゝかなしきいはくらんむ
よみ人しらず

秋乃野紅葉をとゝ
りしぬ人にぬれつゝふる
もとゝにしの所乃ゆゑなれ

秋ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
清花手事
近江[illegible]
源周子右大弁唱女
生取明弁内初生三人
[illegible]
[illegible]
清花
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
清花
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
清花
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
大浦の後[illegible]
[illegible]
右大下
号九條師輔
貞信公二男

ひかるまとゝやかふ小野のかるよりしもの所
小野よし末 美材

柳の池は月をうつしてかゝるへく船なふ人を
うつしは柳をとゝまりやとゝいふん

深雪文

あきの海にうつる月を立帰る
なみは安しへと色しのつゝは
是貞の子こは歌の方分に
よん人しまと

秋の夜は月はひかりまゝ清くしと

人はこゝろのくゝ海はてしもしは
安地の月子にうつて海ならは
やまにふるゆゑ柳にしまし

有五更 有家雅正

いつとても月こゝぬ海はなき柳を
柳をこゝよひのめしまの所
よん人しまと

自新はれなすひかるまの海のよ紋
柳をこゝかんに柳るはかなわ
自をかへる事

紀淑光朝臣 長谷雄子

ぬきとむる秋しかなかりけり　菊栗まさりたる　清正　菊備子

ちくさとよをかりふ玉もりひす

八月十五夜

秋風にいとゝ冴て月雲をたちかくしろあまの浪の雪

延喜御時秋ありけれいたるまつるゝ

女郎花ともいへふ秋の花とし時ハ

つまよわしなをもしろまし所

人まつかしりけふ　菊院

秋まわのいるまいうしをまふ

たちよる人やあれとなかへハ

鄙さしまと　よみ人しも

をこなるしなるしことにしたるを

たましまつむしの程よりとふ

やうの華ひるゝかりしを秋のよりの

月のひかりまいこゝまつ

をこなるしの花のとゝかに秋風

後撰和歌集巻第七

秋下

たいしらず　よみ人も

かちまさるあまなる人はなにやしらなむ
はすゑのあめにぬれしつめつるたかれ

秋風にあひとしあへはいかにすはすきたつ
いろまきとしらて出られは

寛平御時きさいの宮の歌合に

在原棟梁

草もきもかれ行とも見えぬは秋風に
やかてきくひとはわかるゝよりいきたる

題しらす　よみ人も

草もきもちかぬ出やとも見えつゝ春かれ
めるよるへとはいたつらにあまりしかぬ

松の緑かにとまりかれなるわかるゝ
雲井にはまたうつろはぬ松をみるらむ
うつろはぬよをしも人はわかるゝ時

貫之

秋のよに小倉の山とひもみちかけたるわ
しるへなき人のこゝろやかりて

秋の暁のよし葉のこともしゆゑ
いろかまさ、夜ハそめしとおもふは
蛾の野はいのちまれ夜のまさるゆゑ
ちとの草葉のいろかりるのん
いつまとの秋をしの夜秋の暁は
うつろひまとそいろかるくさ

紀友則

恋たてゝ鳴ましめへき秋雪は
ともしまとりせるしのよゆゑと

僕人さらに

誰きけとゝ恋こる夜はとせしの
ちかくしよりもはひとりまちのん
おまりへてのけとたのむ岩の松
いろとる蛾の風はうつるな

在初冬詩事同

詠さく秋ふまはしへかもゆゑ
いつまのかるのまつもかろ雨
いしのひもとくとむまふと詩思
そくもかんきちのよしまちわる
雁ふまそとゝむきのしたの雁ゆゑ
たくるのしらももしもしもの

ひとしの鏡にいとふくやゆるに
秋枝ふく秋よりはいかゆれ

よみ人しらず

風もとのかはまと物やせとかれ
すきくふことなり稲の作ま
和葉にはかはれる一の海より
月のかけようつる屋ちなし
おひさしまそ作りるかとこの人
とかれ作れいなる白ゆかにつく
しかる

右近 女将平子繹女

大かるの姫のたたはいひしまより
物思うへ君にもなる所
新さしまと

よみ人しらず

家にとく物おもひそしさしく霞の
よきいはつりしもきあり つ
おひさしまそ作りる人のちくよそ
こまと御よりて秋はれとこのちやせ
与我もうわとへとともとさ姫と
て後にまれるまうれ

平伊望朝卜女 大姉号天慶二年薨

秋ねのこゝろ
はことの葉にかゝるなん
聞きまほしけれとこの姫とへ
ほのまつ月ほ むりの兼香殿の
とふことに秋しまほ
うまきやへ人のもとにのめし
もかたちと気に見えしを女
の詠まつりし
君こゝろと海はぬるを
秋の紅葉にいつまこ秋里
をいしまと
ほ月の秋しことにやめ
ちるにもかたちに葉にもとも
故宮の内侍に通
り侍る
侍につかしこ
ふとわかこさるハ葉とちはを
おもしろかれの枝にうつ秋
秋やこゝろほ夜の秋に秋揚

長撰和謌集巻第八

冬

たいさいしゃ　よみ人しらず

初時雨ぬきはしめ　なかれはつ

いつまでのうのまつのしたつ

いつまで神ゆるなりともふるとほ

うまはまゆあまとうつ　ひかわ

神無月ゆまこふしとこそ

しくれつゝ冬のかりしめさわる

冬くまとはとまるのにのとまるつも

ひとまとのうまはねをとうまはな

云とまゆる人のきのに神無月

はけはもゆるいつしくまつ

故ひとし時雨ぬるなかれ

ちることはもまをぬのうん

吹風冬しかしとを冬を

とをまゆるまはしかる

秋ひとし我方時雨ふわかれ

こちはまふとうんまうつひまつ

神無月時雨ともまゆひ

山のたおりを好しすると
夜をとこむこ○をこめてはけ寝る
しらひもあへはこまやをくらん
雪のすまし物る日女よつりかる
岩東のはもにと
うきまてこそまりあつ雪を
しのおもふ人のこころなわ
天慶七参議 天徳四中納言 安和二大納言 天禄元薨
師氏朝臣のかましてやかのまへわ
まわけるをよいこそ
よみ人しらす

白雪のつまいへてよくといとこしろ先
とくふたよわもとるまこしろ
題さらは
おもひつゝ稀なくまあくほ久のかの
袖のこりまいとけとも有ふ
あらむ雪のたまをわるまてなすへ
つまつむ雪のたくぬしこ
まこしのほかりまはまたぬるもの
と更のこまいまいわしん
白雲のおりまぬふ山とかへつる

後撰和歌集第九

戀之一

[illegible]

源宗于朝臣

[illegible]

[illegible]

貫之

[illegible]

源[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たろ所のこしてやこぬりかう

石し

よろすゐのやまんともしひあるに

いまよろ雲のたゝまたなるめ

又木とこ

しこのこゝとたのむなしとしこゝ雲の

たゝまく住つのあるんとすらん

郡志らん

もとやこゝをまとゝ名をこんふ所にもこゝ

まもこ所らんともしあをとれるか

夢ゆるよ人ることとなきに言をこ

こしろのとよめるよなる所に

見えぬすてあまし物をうしる色

立名はしてまたるよなきの所

女のもとにつりし所

かれいつ所萬のんいつしかしこ

ともおすきしろ所もをくもしる

石し

あるまゝちるとかくるめ君にこ

うつろひゆるるにあるけれ所を

うの程なほ為ほんとそ物まかわけ
人のちとをとてしてことわかれいつ
かしこまるふ
こんといひて自日をるゝ御をて指の
ら御菓つまに物まう有る御
五し
月日をもつかへる御の明君こゝ御
かひをもしらぬわかゝかゝわ
女をとしをへてんもしあ御ましをの
ましひわかまうわ女ゝ御ましをゝ

まもう御らせとゝ大のめかゝ御をそうの
としも見て御あら御春まをいと里
なく御なまうる御い
在春中御本国
本御めか御是の山田を打かへし
おもひ屋ゝかし人うゝひしき
ひとゝしあまふのうえあひ御なる女
のもとにつかし御
贈左政大下
昭宣公一男時平号
左大臣左大将
本院
ゝのもとへて安ひこぬとまいしむの
ちまゝるもいかゝいまうとゝまうわ

伊勢

人こゝろはなさるゝハまたくぬるゝ
たゝぬおもひの行ひちまゝ
おとこのまゝにこゝかゝひまゝ
をてゝ又ゝもとゝわゝ行ハ女も又
をこのこゝちはなくもゝ恨なく
はゝ返事は
源女のむかしをめ
つゝしともいかゝこゝろ
わゝ前もちくもゝ
仕

敦慶寛平才三二月或名近出八
あつよしの人こ 有薨

里とはなれたる郭公
すゝのとゝるめぬ
えるかゝる人まゝ女を思はゝつゝ
なる
春道のつらゆ
ひたゝらぬこゝ山ゝ子規
人しまゝぬ立ゝ
いとゝ思ひたる女
人めよつゝ見そ又
逢ゝ
出行るゝの人こ 或名
逢ゝとゝ

後撰和歌集巻第十

戀二

女のもとにつかはしける

忠房朝臣

かりそめにあしひ覚ゆるらつゝ
丹多ゐのうたとあやこゝろありつゝ
女のよしよいくこゝろつゝ物
ふといひそくのち

菅原輔文　一本輔に

あふくほひ、たといすよあもひ
たらねまうしよのもとも山つゝれ
父はのいせとも在事もせとわる
女のむかしつゝし、字ゆめ

多人しく

あめしなきもいとふよそゆるちの眼
いのちのてのいかれひやへさき
くらゐかれのちとともにまかれいつ
つゝる

右京

ともにのこそのことのまへしぬる
そこいなかのゝまへとつゝるを
影之ひ

橘敏仲

わたる人のあそにつゝゆふなるあまの河
あかつきもあそよりゆめみるらまし

平中物語

小町のそう

和泉式部

伊勢

源氏の君

紀つらゆき

橘之相納下

よわ花しつかりけるは

三重忠岑

夜よりの松は立よりけし波の
うるふおもはやはいなるたん
おとこの山とよわいまはと人やん
なれいとうまきまさい女まつわを

よみ人しらず

武隠清漢公云之

おもひ出ことたのめしことも君は極
なきなきたゝにたゝに口まれる
花し

是日野のとふ夫の野もまへ人物を
なきとなといつこもとうなり
なきしまと

わすまさをおもふなはけるや
もとゝうしのもまといふたん

人のかうまうけ

右近

おもひんとたのめし人いかなりとまを
いひしことをまいつちいまを
とる國の御下のみやまにけ

ぬるくのこれもよ
わしうまそも人よ
さしけひてあひ
よ

いとうまゆのよるいたのふくつ
あるまへいとひのさしよりあつ

寛平のみかとはくしかるせ給
てのは清根衣めつまよのこ人
とふらせたまふてちかくせら
きとうまくの所はかはせ清根よむ

ましひつくるよ

小八條清息所

立ちくはいふ新しかむりわちかりと
たましのふしろ此園をとしへ
おとこのもとにつかしかは

たた

物の袖は名ならしとも忘のまつ
うとよわなるこのこしぬりにしなし
月をも春といふいいむすれと人の
あるまかれは

よみ人しらず

人のもとにいかはしめてよつかりしかはれ
かはれ花まつ[illegible]
むとしひてたしかはれい

源[illegible]廣明

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後撰宇宙